

(一般社団法人つながり) E-mail tunagari-lucky@ia.litkeeper.ne.jp  
地域サポートハウス兼生 (法人本部) 〒925-0025 石川県羽咋市太田町175番 TEL/FAX 0767-26-0807  
兼生居 〒925-0015 石川県羽咋市大川町79-11 TEL/FAX 0767-23-4137  
3.るるん・5 〒925-0025 石川県羽咋市太田町と8.0 (JAはくい本庄前) TEL0767-23-4090 FAX0767-23-4095  
ホームはっぴい (ホーム代表) 〒925-0015 石川県羽咋市大川町127番地



ふたりが作るチーズケーキ  
珠洲・輪島・志賀町・羽咋市の  
避難所にお届けしました。



↑避難所でぜんざいを食べる  
こうせいさん



## そんな中でも ナイスな二人 やすふみ&なほ

いつものケーキ室ではない作業に戸惑いながら・・・避難所はどこでも、名コンビなのです！！  
いや！場所はどこでも、名コンビなのです！！

## 『かわいい寝顔』 避難生活1週間が経った頃、

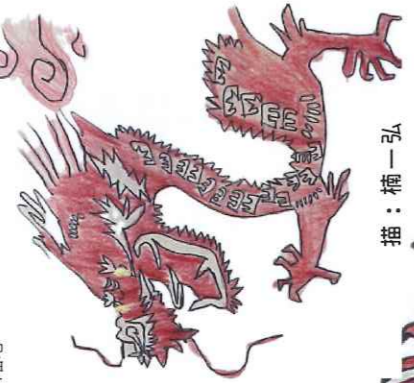
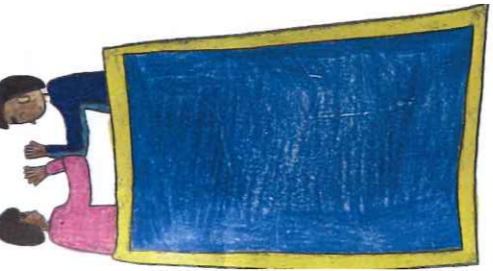
広間で昼寝中・・・見つめ合い

## ナイスな会話

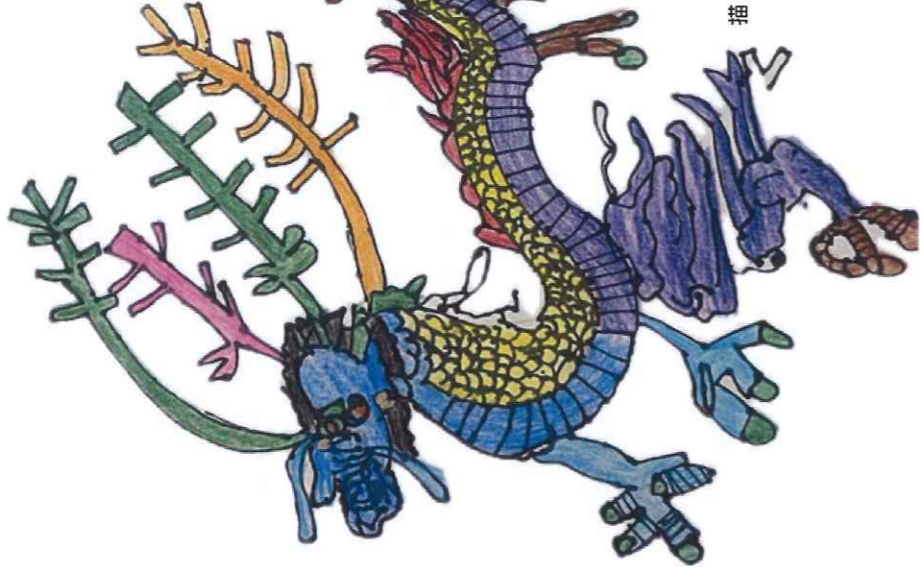
和子「チーちゃん(60歳)の寝顔、かわいいなあ！！」

千澄「カツコ(80歳)もやぞ！！」

やすふみ  
なほ



描：楠一弘



描：神保宏敏

この度の能登半島地震で亡くなられた方々のご冥福をお祈りいたします。  
また、被災され、現在も不安な生活を送られているみなさまにお見舞い申し上げます。



## 日常生活支援サポートハウス 山本さんがやってきた！

餃子 おでん 大根と手羽元の煮込み シチュー カレー つけ物・・・  
毎週、大鍋いっぱいにごちそうをもってやってくる。  
もちろん、山本さんの手作り、おふくろの味だ！  
この味が、たまらんですよ。メンバー達は、山本さんの車がくると鼻をククンさせています。そして、山本さんつながりで民間企業からの物資の応援も頂いて、その量は、半端ではない、ものすごい量なのです。  
つながりから、たくさんの被災者の方々にお届けすることができました。  
山本さん、サポートハウスのみなさん、感謝です。ありがとうございます。  
サポートハウスの住人さん『山本さん、普段はつましい生活をしているんだよ。でも、お金の使い方を知ってるんやて。今、こや！これや！と思うところにお金を惜しみなく使うの。そこが、山本さんなんやて。』



## 全国のみなさんからたくさんの応援メッセージとご寄付を頂きました。

- この紙面では、書ききれません。ご容赦くださいませ。
- ♥ 東日本大震災でつながった福島県のなこそ授産所さんからは、いちばんにメッセージが届きました。
- ♥ ちいばあ(長野県ひとり人形劇がらくた座 木島千草さん)からは、LINEが毎日、送られてきて『辛いけど、笑ってね、わっはっはっ』『さあ、背筋を伸ばして。体操をやろう』と動画も。こんな応援の仕方があるんだね。
- ♥ 「このチーズケーキ、ブラウニー、おいしい！全国に売り出そうよ。私、みんなに売るから、送って、送って！！」「パティシエやっち君、いっぱい作ってよ」県外の方からの声。

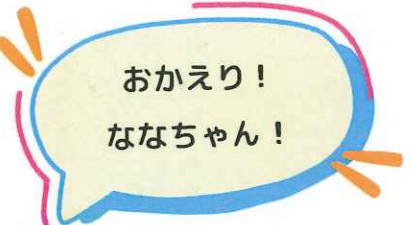
復興ギフト作ります！ご購入お待ちしております！

みなさま、本当にありがとうございます。

## 西澤「生きる覚悟も死ぬ覚悟もした」

とても重たいひと言。

メンバーとスタッフの安否確認を急いだ。  
ただひとり西澤スタッフと連絡が取れなかった。LINEも既読にならない。『おじいちゃんが輪島にいる』そんな話を思い出した。地震に巻き込まれたにちがいない。  
西澤スタッフのご家族に確認すると、やはり、輪島にいたことがわかった。  
メンバー達の避難生活を守りながら、彼女のことが頭から離れない。LINEを送り続けた。  
「頑張れ」「待ってるよ」「お父さんがそちらに向かったよ」「もう少しだよ」  
お父さんが瓦礫を乗り越え孤立している集落に向かった。  
無事。生きていた。よかった。



2024年元日。16時10分、地震発生。

地震発生時の正確な時間を知ったのは、翌日だった。

自宅にいた。携帯のけたたましいアラーム音が鳴った。「そう、大したことがないだろう」と高をくくった。が、2回目のアラーム音を止めたと同時に、「ゴウー」という音と強い揺れ、何かが割れる音、咄嗟に戸を開けて外に飛び出した。家が揺れ、地面が揺れ、何がどう揺れているのか、判断できなかった。上を見上げた時、空も揺れている感じがした。テレビから大地震、津波警報。「逃げなくては」。携帯だけを持って車に乗った。高台へ、永光寺(寺境町)だ。途中、県外にいる娘から「津波、逃げて」と連絡が入る。そして、「落ち着いて」ということばにハッとされた。「落ち着いて、落ち着いて」と自分に言い聞かせた。

車を走らせながらグループホームのことが頭に浮かんだ。和子さん、美恵子さん、千澄さん、当直は寺井スタッフだ。4人はどうしてる？ 気になりながらも戻ることはできない。どきどきしながら、寺井スタッフに連絡した。「だいじょうぶか。津波が来る。」

「すみいるは再開の目途が立たない。直していくのか、新しい建物をさがすのか。どちらも、いつになるかわからない」  
「つながりや働きながら、暮らしている部分は、他のホームに移り生活していくか」「自宅に帰るか」「こちらも尊重し、安心できるまで応援していくことを伝えた」  
「聞いてほしい。気持ちをお聞かせしてほしい」  
「達矢さんは自宅が全壊。帰る場所がない。AKBへの転居となった。」

「すぐに逃げて。永光寺に来て。」  
「無事です。はい。」

寺井スタッフの息づかいから必死さが伝わってきた。ホームメンバーと合流できたのは、1時間後くらいだったろうか、いや、もっと早かったのかもしれない。しかし、とても長く感じた。

その間に、自分の家族に連絡をとり無事を確認した。テレビは「大地震です。逃げてください。」「後ろを振り向かず高台に逃げてください。東北の震災を思い出してください。」とアナウンサーが繰り返し呼びかけている。怖かった。不安だった。

連絡が入った。  
「達矢と恵美は無事。」

「近所の人に助けられた。」「民生委員の方の自宅に避難した」あゝそうだった。恵美さんと達矢さんは自宅に帰っていたのだ。一緒にいたお母さんも無事ということ、ほっとしたが、携帯に送られてきた写真を見て絶句した。達矢さんらの自宅が形もなく崩れ落ちている写真。

自宅全壊。

よくこの中から3人が怪我もなく出てきてくれた。

「わけわからんがになって、母ちゃん連れて裏から逃げた。裸足やった。スリッパは隣の人が貸してくれた」と恵美さんから後から聞いた。「近所の方、民生委員の方に感謝である。」

もうあたりは暗く永光寺は車でいっぱいになった。津波警報が解除され、永光寺から降りることを決めた。

寺井スタッフは、ホームメンバー3人を連れて、永光寺からいちばん近い避難所の余喜公民館で、達矢さん、恵美さん、そのお母さん(お母さんは、後日、地域のシェアハウスへ避難)と合流。一夜をこの避難所で過ごすことも考えたが、メンバー5人の様子や避難所の何もない環境では夜を過ごすことは難しいと考え、グループホームより少し高台にある夢生民に移動することを決断した。

20時夢生民到着。

「夕食はどうする」「千澄さん、和子さんの薬がない」「布団もない」。寺井スタッフと2人では動きが取れない。中村スタッフに緊急連絡、来てもらった。非常持ち出し用品と食料、布団、薬を取りにホームに戻ったが、いつもと違う周りの様子に身体が震えた。

和也「おれは、大丈夫や。(すみいるができるまで)待つとるよ。それまで家から通うわ。時々、AKBに泊まりたいかなあ。」

鳥井「家があるので大丈夫です。すみいるができたら、お願いします。」

康文「家から通う？他のホームに移る？どちらにする？」と訊くと、迷わず「家」を選ぶ。  
「時々、AKBに泊まってみる？」と訊くと、「うん」と頷き満面の笑顔で答えていた。

昌也「俺は家から通う。他のホームには行かない。AKBにも泊まらな。絶対、すみいるや！」



道路は隆起し、陥没しているところもある。電信柱は傾き、車での移動は困難だった。水、食料、薬、布団、非常持ち出し品を持てるだけ持って運んだ。  
避難生活が始まった。

一旦はホームに戻ったものの、断水、下水道・トイレが使用できなくなり、太田町の楽生に移動することにした。楽生は壁のひび割れはあるものの、電気・ガス・水・トイレ、ライフラインが復旧していた。ご飯もつくれる。シャワーもできる。

1月5日から自宅が断水中のメンバーや子どもたちを楽生の1カ所ですしずつ受け入れた。大人も子どももスタッフもみんながいて、しんどいけど、楽しい、「まるで合宿のような生活やね」と誰かが言った。

はっぴい、AKBのメンバーたちがホームに戻ったのは、1月29日。ゆっくり眠れたわ。涙と笑顔ありの朝だった。



↑5人の布団が並ぶ。雑魚寝。

昌也さんの話を聞いた時、あゝ昌也さんにとつてのホームはすみいるで、一緒に暮らしたいメンバーもこの4人なんだ、絶対に譲れないことなんだ、と感じた。説明しなければならぬというものの、自分は、なんて簡単に「他のホームへ移ることを言ってしまったのだらう、と後悔した。申し訳ない。」

誰とどこで暮らしたいかは、自分で決めること。いろんな場面で、和也さんは、「それが俺らの原点だから」とよく言う。本当にその通りだ。

「すみいるで、また、みんなと一緒に暮らしたい」という彼らの思いをもう一度、深く心に刻み、実現しよう。動きださなければならぬ。現在の『すみいる』の建物の改修は、周辺道路、近隣家屋の状況も考え、難しいと考えている。

新しいホームの建物を探るか、新しい土地で建設するか、まだまだ、模索中で結論が出ていない。どちらにしても、お金がかかる。みなさまにも、ホームの実情を知って頂き、地域の中で仲間たちと愉快地楽しく暮らしたい、生きていきたい、という彼らの人生の応援をお願いします。